

令和5年度第1回 オーテピア高知図書館サービス計画推進委員会 議事概要

1 日時:令和5年6月23日(金) 14:00~16:00

2 場所:オーテピア 4階 ホール

3 出席者:

[委員]加藤委員長、篠森副委員長、齋藤委員、常世田委員

[オーテピア高知図書館]杉本高知県立図書館長、高石高知市立市民図書館長 ほか

4 議事次第

(1) 開会

(2) 議事

①オーテピア高知図書館サービス計画の取組状況について

[資料1~3]

②重点的取組について

・県立図書館の独自機能の向上

・市全域サービス活性推進事業について

[資料4~5]

③その他

[資料6]

【委員】

ただいま事務局から説明があった内容について、委員の皆様のご意見をいただきたい。

【委員】

●サービス計画推進委員会について

今日のように(報告内容の)量が多いと難しいかもしれないが、事務局から報告をいただいてコメントする、というこれまでのパターンから、できれば終わりのほうに少し時間を残し、報告に対するコメントだけではなく、課題についてキャッチボールができると思う。

それから、こちらも重要だが、次の議題(議事②)も含めて、劇的に内容が進歩していると思った。ざっくり言えば、成果と、やろうとしている目標や内容、課題の整理が、かなりクリアになっていると言える。今までは注文することのほうが多かったが、今回は「こういうところまでできている」とか、「こういうこともきちんと考えている」と感じられるスタイルになっている。オーテピア全体の進化をかなり感じた。今日は省略するが、コメントしたいと思ったことの9割は、そうした報告の中に方向性が示されていることを良しと指摘しようとする内容だった。

良いと思える大きなポイントは、まず、県あるいは市の行政課題に対して、具体的にどのよう

に貢献していくのかということが、かなりはっきりしていること。また、実際チャレンジしてみて、その中で問題点をきちんと整理したうえで、では次はどうしていかうかという方向づけが全般的にできているというところが大きい。いつも言っている話だが、図書館単体で動くだけでは効果が限られるし、コストに見合った限界もあり、なかなか難しいと思うが、いろいろな団体や機関、あるいはボランティアの方々など、様々な相手と一緒に動けるという意味では、図書館は本当にウイングの広い組織である。そのウイングの広い組織が、例えば、資料費や一定の人材を得て、なおかつ必要な相手とお互いにきちんと話し合い、最良の組み方をして、得るものを得ていくという形が定着してきたことを実感している。

●電子書籍の提供について

1ページの電子雑誌のサービスについては、一括登録を働きかけて、きちんとステップを踏んでしっかりと利用が増えている。今の時代、この方法は非常に大事だと思う。児童・生徒に全般的に働きかけができるシステムを得たというのはかなり大きいし、これからにつながる。今まで生涯教育という言葉で括られてきたのが、学校教育も含め、高知で生まれ育った子どもたちが自分に必要な情報を的確に捉えて、将来の高知を担っていく、そうした人材に育っていくということのかなり大きなベースが一つできたという理解した。

●情報リテラシー向上支援について

情報リテラシーの向上には アプリの活用などがある。提案だが、例えば、こうしたアプリなどの活用を公民館と一緒にできないかと思う。公民館もいろいろなことをしているところなので、地域の人たちに情報をうまく伝えられる。特に、高齢者になってくると、情報を得る手段というものが段々となくなってくるので、そこを何とかしたいという思いを持っている公民館が結構あると思う。私の地元などでもそうだ。地域の図書館を含め、情報が他の人よりも薄くなっている、手に入れられなくなっているところに対して、公民館と図書館が協力しながら、必要な情報を得ることができるノウハウを伝えていくことは、これからの高齢社会の中でプラスになると思う。

●ビジネス支援サービス及び健康・安心・防災情報サービスについて

ビジネス支援は、その存在をどこまで知らせることができるかが永遠の課題だと思う。これもかなり進歩していると言って良いような感じがあるし、健康・安心・防災情報サービスについても、全般的に一定の前進が見られるようになってきている。繰り返しになるが、オーテピアの職員が、何が必要かをきちんと理解したうえで前に進めていることを、この2つのサービスに関連して感じた。

●行政支援サービスについて

行政支援サービスについて、いつも言っていることだが、図書館というものは、一般の人たちが持っているこれまでの図書館像とは実は違う、ということ行政の人たちに理解してもらうことが非常に大切だ。私が鳥取県立図書館で最初にやりたかったのは、そうしたことである。

趣味的なものとか、子どもの本を置いているところと一般の人たちが考えている図書館ではなく、実際には、図書館はいろいろなところと組んで情報提供することにより、様々な分野で地域にプラスを提供することができる。そのための人材であり、資料費だと思っているということをいつも言ってきた。そうしたことは非常に大事であり、例えば、ビジネス支援を我々がやるだけではなく、マンガでの応援の事例などがマスコミの目に留まり取り上げられる。もちろんマスコミの人たちもその出来事や意義を理解したうえで、ぜひ知ってほしいと思って載せる。こうしたことの出現は、行政目的に役立つということ、我々が単純に内部的に思っているだけでなく、世間も理解してくれつつあるということが、見えてきたなと思った。

●児童サービスについて

児童サービスでは、情報リテラシーの話と、④の子育て支援の項に「館内に散在していた子育て関連の雑誌を、まとめて配置した」云々と書いている。とりわけ大きいことではないが、実際に使う人たちにとっては、とても大事なことだと思う。このような実践ができていき、「使いやすくなった」という声が出てくるようになると、とても嬉しく思う。

●ティーンズ・サービスについて

ティーンズ・サービスについては、もっと力を入れなければいけないところもあるが、実際にティーンズが我々とどのように協同してくれるのかということについて、いろいろと知恵を絞りながらやっているということは非常によく伝わってきた。

●多文化サービス等について

多文化サービスも、図書館にとっては非常に意味のある得意分野だと思う。この分野は多文化と単純に一言では言えない。どういう理由で来日しているのか、どういう家族構成で来ているのかなど、一人ひとり違う来日条件があるわけで、それに合わせてどのようにサービスを提供していくかという課題がある。

もう一つは、オーテピアだけではなく、市町村の図書館も、これから多文化サービスをやっていく必要がある。ただでさえ今、労働力不足というような問題がかなり大きくなっていて、こうした人たちに助けてもらわないといけなくなってきているときに、高知は住みにくいと思われるのか、あるいは、高知に来ると、これだけいろいろな形で自分たちのことを守ろうとしてくれているというふうにも思ってもらえるのか、そうしたことがこれから先、地域にとって非常に大きなポイントになると思う。だからこそ、オーテピアも力いっぱい旗振り役をしながら、オーテピアだけではなく、県の中の雇用や産業、多文化を担う国際的な部署などとより緊密に協力しながら、市町村の窓口で必要なものが受け取れるようなシステムづくりを、ぜひ進めていただきたいと思う。

市町村支援については、このあと出てくるので省略する。

高知市全域サービスについても省略するが、資料を見て非常に驚いた。ここまで来たかと大喜びした。これについては、あとでコメントする。

県立学校、大学については、順調に進められているなと思った。

●サービス計画推進委員会について

あとでキャッチボールができればとはじめに話した。このような報告も大事で、この場で受ける報告で得られるものもあると思うがこれからは、もっと現場を見て、担当の方と直接話をしながら、さらなるステップを考えるということもしたほうが良いと思う。そのように、現場からの情報も直接得ながら、それも踏まえて我々の提言やアドバイスができるような形に変えることができれば良い、という提言をさせていただきたいと思う。

●職員のモチベーションについて

一般論としての話をさせていただく。業務の中身は非常に充実していると思うが、職員の皆さんの疲れ具合はどうか。これだけやってきたことを考えると、疲れていると思うが、その疲れは心地よい疲れかどうか。要はモチベーションの話である。以前、講演か何かで言った気がするが、図書館がどうしたら本当に有機的に良い動きができるか、成果をあげることができるか。よく世間では、お客さま第一で、何よりも来館する利用者の満足が第一と言う館長が多いが、私は全然そうは思っていない。図書館の中で働いている職員がどれくらいのモチベーションを持って仕事ができているかということのほうが、余程大事だと思っている。そのことがなかったら、その図書館は伸びない。伸びずに結局これまでのことを繰り返すか、あるいは、新しいことを無理やり入れても十分できずに、今まで十分できていたことすらダメになっていくというようなことがしばしばある。図書館に限らず、そういった組織をかなり見てきた。地元の鳥取県の中でも。だから一番大事なのは、職員のモチベーションだと思う。そういう意味では、一人ひとりの方が、今の仕事かどのように役立っているのかということ、もう一回しっかり腹に入れてほしい。また、必要な仕事の中でも優先順位を付けてほしい。そしてたまには、仕事を忘れる機会もあってほしいと思う。

それから、上に立つ人には、私と同じ考えを持つとは言わないけれども、オーテピアがこれから伸びていく、さらに地域のために働ける機関になるために、職員のモチベーションを保つことが非常に大事だということをぜひ再認識していただきたいと思う。

【委員】

●サービス計画推進委員会について

私も委員と似たような印象を持った。報告書全体について、各ページの表現が非常に具体的だ。以前は、抽象的に努力するという印象がそこそこあったが、1行1行、非常に具体的な表現になってきた。つまり、それだけ具体的な仕事を皆さんがされてきたのだろうと思う。

第1次計画の時期は、皆さんは、とにかく仕事をこなすことが最優先で、力いっぱい走ってきたかと思う。前回も同じようなこととお話したが、そろそろ見直しをしなければいけないということだと思う。

各ページにあがっている各分野のサービスのところに、非常に重要なことと、それほど重要でないことが順不同で書かれている。おそらく現場の各業務でもそうだろうと思う。それをサービスごとに優先順位をつけていく必要があるのではないかと思う。その中で利用者の反応

を見て、続けるべきことと、さらに推進していくべきことを判断しなければいけないということが次の段階だ。

それから、皆さん一人ひとりがかなり成長されているのではないか。以前は、計画で決まったことだからやっているという印象だったが、今は、かなり自覚的にコントロールして仕事をしている。つまり仕事を理解して、仕事をしているということだと思う。全員の方と話したわけではないが、対面で話をしたり、電話で話をしたり、日常のいろいろなやり取りの中で何となく分かる。自信の持ち方、言葉の喋り方など、一つひとつの説明の仕方から、皆さんが力を付けてきていると感じている。

そこで、委員と同じように、我々もそろそろ、このように紙ベースで報告をいただいてコメントする段階から、時間を何とか見つけて、現場を少し見る段階に移るべきかと思う。

今回は、建築物の外観を見るために、ぐるっとひと回りしていくつか気がついたことを話したが、そういうことを我々委員もしなければいけない時期なのかなと、いうように感じた。

●新技術の導入について

そのうえで第2期計画で検討していかなければいけないことは、まさに ChatGPT、ロボット等の導入と非来館型サービス。

コロナ禍によって日本の図書館は馬脚を露してしまったが、例えば、アメリカの図書館では、膨大な電子資料の提供をすでにやっていたし、e レファレンス等についても、著作権上の公衆送信権というのがないので条件が違うということはあるが、気楽にネットを使って様々な著作物を配信するというをやっていたので、コロナのためにリアルな図書館を閉めても、かなりのサービスを継続することができていた。ところが日本の図書館は、閉館してそれっきりで、そのことについての反省が図書館界からほとんど上がっていない。そういうことに対して、非来館型サービスを推進していかなければいけないと思う。お金さえあれば、現在でもメタバース上に図書館を作って、24 時間サービスをやろうと思えばできるような段階に来ている。先ほどお話したAIを使ったレファレンスも、ご存じのとおり、都立中央図書館は、昨年度、実証実験をやって、今年度から実際にサービスを開始しているので、夢物語ではない。私のゼミの学生が、2年前に卒業論文でロボットの導入についての研究をしており、大学や公共施設を含めて、その時点ですでに24 館でロボットを導入しているという実例があった。今はもっと増えているのではないかと思う。現状のサービスの状況・取組を維持しつつ、第2期計画ではこれらのことを考えていかなければならないと思う。

図書館界に40年以上、身を置いて多少見えてきたことがある。それは新しい技術を導入した時の経緯。私の印象に一番残っているのは、80年代にコンピュータが導入される時に、図書館の現場は大反対したこと。コアな利用者も大反対。しかし、10年を経ずして、導入が当たり前になってしまった。BDSもそう。利用者を泥棒扱いするのかということで大反対。しかし、世の中の他のところでも同類の装置が入ると、至って普通になってしまった。これは、ビデオの貸出しを始めた時もそうだし、おそらく貸出しということをはじめた時も全く同じだと思う。なので、AI、ロボットの導入とか、非来館型サービスというのが、今は非常に非現実的な感じがするが、実は同じような経緯を辿るのではないかと私は思っている。確かに導入の時期は未熟な技術

なので、表面的なそごが生じる。しかし、図書館サービスや業務に本質的に合致するものは、必ず一般化していくということ。今私がお話したような技術に関しては、明らかに図書館のサービス、業務と親和性があるので、絶対進歩していきだろうと思う。

私の司書講習の修了生と勉強会をやっているが、そのうちの一人が ChatGPT 本体に、「Chat GPT があれば、図書館や図書館員は要らなくなるのか」と質問したら、ChatGPT は何と答えたか。素晴らしい答えだった。「ChatGPT には限界がある」と。図書館員は一人ひとりのニーズに沿って、その人の状況などから判断して、そして、地域の状況も加味して、より高いサービスをする。ChatGPT を使って、より高いサービスを提供できる司書を目指さなければいけないという答えからも、ChatGPT が入ってきても大丈夫というようなことを全体としては感じた。

そこで、むしろ私が心配したのは、レファレンスの件数が落ちているというところ。1ページで所蔵レファレンスの少なさが原因だという説明があったが、私がいた浦安では3種類に分けて、所蔵レファレンスとクイックレファレンス、そしていわゆる本筋の難しいレファレンスの、3つに分けて統計を取っていたので、そろそろそういう工夫が必要かなと思った。

●情報リテラシーの向上支援について

情報リテラシーの向上支援というところは、非常に重要だと思う。アメリカなどの規模がそこその図書館では、情報リテラシーを市民に身に付けてもらうための講習会を、専門の部屋を用意し、司書が講師になって、毎日のように利用者に対して行っている。ご存じの方もいると思うが、ライブラリー・オブ・ザ・イヤーを受賞した大阪市立中央図書館は、繰り返し講習会を行った。それによってデータベースの利用率が上がっている。利用者の中にニーズは確実にあるが、放ったらかしで、ただデータベースを使ってくださいということでは使えないので、利用者に対する日常的な繰り返しの支援というのを組織的に行うべきだと思っている。これは、あとの市町村立図書館の支援のところにも関連してくるが、そういう講習会を市町村絡みでやっていくということが必要で、可能かどうかは別の話になるが、データベースの使用料に関しても、県内全体で使えるようにするような契約についてを検討していくというようなことも必要ではないか。アメリカの図書館では、図書館に来なくても自分の家から自分のパソコンを通じて検索するというようなサービスが当たり前になっているので、そういう県域全体に対する支援というものも視野に入れていく必要があると思う。

●ビジネス支援について

ビジネス支援については、毎回話しているが、(資料2 3ページの)②のブックリストのところで、各組織・機関と連携するとある。これについては委員からも以前から話があるが、連携という言葉は語へいが生じるのではないか。つまり、行政とかさまざまな機関もサービスの対象者だということ。連携して何か事業をやるのではなく、行政機関が業務として行っていることを、図書館が情報提供等を通じて支援するというのが正確な表現だと思う。そこと一緒に仕事をすることではなくて、そこにメリットが生ずる、そこがサービスの対象者なんだと考える。鳥取県立なんかでもそのような問題が最初に起きたと聞いているが、連携して何かを

やらされるんじゃないかと、相手が警戒するので、図書館サービスを提供するというように位置づける必要があると思う。

出前というか、出張っていくということが書いてあるが、例えば、鳥取でよく話題になるが、銀行の支店長会議の場に図書館員が乗りこんで行って、その人たちにビジネス支援の話をして、そこで本の貸出しをする。鳥取の館長がよく仰っているが、そこに行かないとその業種、その分野の人たちが持っているニーズが分からない。広く浅く、ビジネス支援やりますよと言っても、サービスを受ける側のニーズは多様なので、取組が曖昧になってしまう。やはり共通のニーズを持ってるところに飛び込んで行って、この分野にはこんなニーズがあるんだということを一つひとつ確認していくということがポイントだと思う。

●行政支援について

行政支援のところは、県の政策に沿った形での行政支援というのがポイントだと思う。市町村立図書館による行政支援というのは、まだ、高知の場合は難しい状態なので、例えば、農業支援をやっている県のセクションが市町村に対する農業支援を農政というラインでしているはずだが、その人と一緒に、市町村の農政関係のセクションへ出かけて行って、そこで県の農業政策の話をするときに、さまざまな支援を市町村立図書館ができますよという話をしてしまうということ。もちろん、その場に市町村立図書館の担当者にもうに越したことはないが、市町村図書館だけでは苦しいので、県立図書館がバックアップしますよと。そういうところまでやらないと、行政支援を市町村立図書館がやるというのはなかなか難しいので、オーテピアが行政支援をするのは当たり前だが、全県域で図書館政策を進めていくということは県立図書館の仕事なので、そこがポイントになると思う。

毎回話しているが、このオーテピアの構想が出てきた時に私は大反対したが、その時、県の教育長さんと議論したことの一つは、可能性があるとしたら、全国の都道府県立図書館がやっていない、どこもやっていない、市町村立図書館への支援を本気でやりましょうと。直接サービスの負担が軽くなれば市町村支援をやりましょうと。県立図書館というのは、アメリカのカウンティの中央図書館に相当する。これは前から話していることになるが、アメリカのカウンティの中央図書館というのは、その図書館が所属している自治体の中央図書館であり、カウンティ全体の図書館も兼ねているので、言ってみれば、市立図書館と県立図書館を合築しているオーテピアと非常に近い。そこでカウンティ全体の図書館政策を行っている。そういう意味では、市町村支援が皆さんの中心業務になると考えている。

それから、行政支援は正確に言うと二つあって、これは担当されている方は十分に頭に入っていると思うが、例えば、県庁の交通課だったら、交通課の職員が交通政策の報告書を作らなければいけない。そのための統計が要するという時に、そういう統計のデータをオーテピアが提供するというのが行政支援サービスの一つ。直接的に各担当が必要な情報を提供するということ。もう一つは、先程お話した県庁の交通課が県民に対して交通関係の施策を周知しなければいけない時に、図書館が一緒になって PR、周知をする、つまり、行政担当がやらなければいけないが、自分たちでは力が足りないところを、図書館の機能と様々な情報を使って一緒にやるということ。行政支援は、その二つがあるのではないかと考えている。そこを整理して取り組

んでいただけたらと思っている。

以前、SDI サービスというのがあった。各行政担当が必要とする分野を聞いておいて、図書館がそういう情報を積極的にキャッチし、その担当課に送るというサービスであった。これは昔、北海道の北広島市なんかでやっていたのだが、そういう SDI サービスなんかも検討する必要があるのではないかとと思っている。

●ティーンズについて

ティーンズについては前回もお話したが、日本では児童担当がやることが多いけれども、ティーンズ・サービスが生まれたアメリカでは、児童サービスがやってはいけなくて教科書に書いてある。ヤングアダルトサービスなんだから、成人部門がやらなければいけないと。日本のヤングアダルトサービスは、どちらかというとなんかなくても図書館に来る「いい子ちゃん」を相手にするサービスになりがち。アメリカでは、道路でピストルを撃ち合っているようなヤングアダルトの首根っこをつかんで、まともな市民になれ、まともな大人になれと、そういう子どもたちを図書館に連れてきて、金八先生のようにやりあうというのが、本来のヤングアダルトサービス。なぜそんな偉そうなことを言うのかというと、日本にヤングアダルトサービスを紹介した都立の方がいて、その方と日本で初めて勉強会を組織したときに、私も真っ先にメンバーになって、それらのことをいろいろ訳して書いてあった。青少年期の不安な精神状態に寄り添うということ、やはり図書館に来ないようなティーンズにどうやって図書館として接触するかということだと思う。それこそイジメもあるだろうし、社会に対する不安もあるだろうし、セックスの問題もあるだろうし、そういういろいろな問題を抱えているティーンズに対して、どうやってアクセスするのかということを考える必要があるのではないかとと思っている。またあとでお話ができればと思っている。

【委員】

両委員に相当お話しいただいたので、私から言うことは少ないが、両委員の意見と同じで、資料が分かりやすくなったということ。私が学術振興財団へ出すように、これまでの取組と課題、今後の取組といった形で整理されており、私個人は読みやすくて、良かったと思う。

●健康・安心・防災情報サービス

私が良いなと思ったのは、4ページの地域共生社会推進課と連携する、というところ。連携というよりも行政支援サービス対象者であるということ为先ほど言われ、また、委員からは公民館との連携という話もあったが、図書館が津々浦々で行政サービスを提供しながら地域社会を構築していくというのが本来的な事務拠点というか、皆が集まっていろいろ考える場所になっていくのかなという印象を受けた。

●ティーンズ・サービス

8ページに、ヤングケアラーの話がある。これは福祉政策としてヤングケアラーについてどうしましょうかという行政サービスの視点だけでなく、ティーンズ・サービスにヤングケアラーと

いう話題が出てきたことに非常に大きな意味がある。特に、ティーンズというのは将来の市民であり、今は18歳から投票していただかないといけないので、そういう意味では、社会の諸問題を若いうちから考えていただくということが、非常に素晴らしい。

●図書館利用に障害のある人へのサービス

10ページの④に、konoLibraries があって、全国の図書館で初めて提供を開始したと。これは大変素晴らしいこと。著作権の関係で、できないと思うけれど、私も本を読むのをやめて音で聴きたいと思うくらいで、素晴らしい取組だということ。

それから、個人的に前々から意見を申し上げていた市町村立図書館との連携ということと、高知市民図書館分館・分室との連携ということについては、重点的に取り組んでいただいているので、のちほどお話を伺うのを楽しみにしている。

第2期については、非常に順調にスタートしているのではないかなと思っている。

今申し上げたこととも関連するが、地域共生とか、公民館との連携とか、地域社会との連携というところへ行かなければいけないということがある。

図書館は、情報収集というのが主眼ではあったが、だんだん思考や議論の場へ移っていかなければいけない。最終的には、情報発信の場になっていかないとけないかということ。例えば、ビジネス支援をしたら、その成果を分かりやすくいろいろなところでお伝えしていくとか、そこまで視野に入れて、発展していければ良いかなということ。

あと、委員が言われた ChatGPT への対応、ロボットへの対応、非来館型サービスは、第3期に向けてということもあるが、これから非常に重要な課題なので、これは少し濃密に議論をしていきたいところ。

<事務局 議事2説明>

【委員】

ただいまご説明があった内容について、ご意見をいただきたい。

【委員】

●県立図書館の独自機能の向上

(多文化サービスについて)まず、高知県あるいは高知県内の各市町村が、(在留外国人に)選ばれるところになれるかどうかということについては、県立図書館、オーテピアがどれだけ踏みこめるか、サポートができるかということが、まずはベースかなと思っている。当然、図書館がやれる範囲はあるが、基本的に図書館は何でもできる場所であり、どこにでもアプローチができ、どんな課題にでも首を突っ込むことができる。まだこの外国人材(へのサービス)というと、行政全般にも有効な手段はそんなに数があるわけではない。それでいてその自治体を選ばれるかどうか、ということしていくと、その地域からウェルカムと言ってもらっていると思えるかどうかは大切なこと。例えば、外国人材の方向けの様々な資料、例えば自分の子どもに母国語を忘れないようにしてあげたいというときに、絵本などの提供などのサポートができると

か、そういったものが図書館の中に揃えてあるか。あるいは、自分が勉強したいと思ったときに、母国語によるサポートならベストだが、それがだめでも英語できちんとサポートしてもらえるようになっているか。だが、市町村でそれができるのかといえば、単独ではとてもできないと思う。それをどうしたら市町村が行おうという気になるか。あるいは、実際にやる時にいかにストレスなくやれるかということでは、図書館だけでは無理だが、関連する部署と一緒に、どういうふうにやれば良いのかといったことを話し合いながら、具体的に進めていくことによって受け入れの体制ができていく。

今日の午前中の「かみーる」の視察の中で、農業の関係など、いくつかの提案があったので、特に農業のことについては、かなり突っ込んでお話した。特徴として、皆さんご存じだと思うが、香美市というのは農業が主たる産業であり、農業を目的とした移住というのが最近結構多いということだったが、それに対して図書館に何ができるのか。香美市の図書館の資料費は750万円だったと思うがその額でできることは、たかが知れている。今日提案したのは、それをいくらか増やしてもらうこと。ずっとということではなく、例えば、3年間は200万円ずつ増やしてもらって、農業に必要な資料が揃えられたきちんとしたコーナーをつくり、それを説明できる職員などを配置する。当然それでは足りない。だからそれをオーテピアがサポートするなど。市も県も図書館だけでやるのではなくて、農業の担当部局や、移住・定住に関連する部局と教育委員会及び図書館が一緒になって、具体的にどういうものを置いたら、外からやって来た人がここで農業をやりたいと思うかを考える。当然、図書館だけでそのようになるわけがないが、いくつかの候補と思う自治体を並べて比べたときに、ここにはこういうものがあるよね、自分たちのことを考えてくれるよね、いつでも来られるよねここだったら・・・というようなものが提供できる。それをやるためには、市町村にも多少の出費をしてもらわなければいけないが、県立図書館としても、必要なものを揃えて提供してあげてほしい。即応できるそれだけの資料の品揃え、あるいは、そういったもののリクエストが現時点でないのであれば、直ちに購入して提供できる資料費を(県立図書館が)確実に持っていて「何かあればすぐサポートできる。だから安心して市町村の図書館はやってください」ということが必要。それを市町村が納得して、これなら心配せずに頑張れると思ってくれれば、市町村の図書館はいろいろな課題がある中で、これをやってみよう、あれをやってみよう、それによって地域にプラスを提供しようというふうに変わっていくと思う。

ここに挙げている例で、土佐市とか香美市というのは、新しいものを建てて、今まさに上げ潮。良い感じで進みかけている。そういうところであればなおさら、単純に、本の貸出しが増えて、良かったですねではなく、図書館というのはあらゆる面で地域のためになるんだと地域の人が本当に納得してくれるような働きをしてくれる可能性がある。県としてはそういうところまで責任をもってバックアップするんだという、そのあたりがうまく伝わると良いなと思う。繰り返しになるが、図書館だけがジタバタするのではなく、それに関連する部局と一緒に、部局横断でそういったものをサポートしていくということが肝要なのではないかと思う。そういうところで、モデルづくりをやるようにしたい。今寝ている図書館を起こすということも大事だが、それは本当に手間がかかる。それをやるというのなら、今、本当に上げ潮のところに、もう一歩前に進んでみませんか、それによってあなたたちがやっていることが県全体のモデルに

なるような、そういうところまで行ってほしいんですというようにやるほうが、少ないエネルギーでより大きな効果を県全体に与えることができると思う。そうすることによって、確実に選ばれる市になるためには、図書館というのが有効なんだなということが、全県に広がるようになればおのずと手を挙げるところが増えるというか、自分のところもやってみたいというふうに変わってくれると思う。

今日、この会が始まるまでに(県の)生涯学習課と打ち合わせを行い、今年2回、市町村の生涯学習の部署で図書館を担当している職員の方を対象に、私を含めて二人の委員で研修会をやるかという話をしたところ。そうしたことも含めて、自覚をもって取り組んでくれるところを増やしていくということを、ぜひこれから生涯学習課と一体になってやっていただきたいと思う。

●市全域サービス活性推進事業について

市の全域サービスの活性化については、最初に頂いた資料を見ただけでも結構喜んだが、あとでいただいた資料を見て、うんうんなるほど、なるほどと言って、納得感がさらに増した。ここに書かれているとおりだと思う。要は、一つひとつの分館分室は、性格も何もかも全部違うので、それに適合したものを分館分室が提供していくことについて、本館であるオーテピアがいかにサポートできるかということが大きなポイント。

潮江(分館)に行って思ったこと。私は県立図書館での勤務だったので、分館分室に行くことは元々ほとんどなかった。また、ここの分館というのは直営でないというお話だった。で、実際に行って彼らが実際に活動している内容や実績を見ると、持っていたイメージとは相当差があった。現場は、すごくよくやっているというのを、潮江を見て思った。高知市は元々、こういう分館分室を各地域に持っているわけだから、それが本当に活性化していくのだったら、ものすごい戦力になると思う。

それと、本の貸出冊数も、オーテピアができて、みんなが借りに来て(分館分室が)減るのかと思ったら、減っておらず増えている。逆に、オーテピアができることによって、図書館に対するイメージとかそういったものがおそらく変わってきて、それぞれの分館分室に借りに来る人が増えているというプラスに作用している。全般的に動きが前向きになっているという今の状況の中で、個別の特性を伸ばしてやっていこうというやり方は、真に時宜を得ていると思う。ぜひこういった方向で進めていただきたい。これが進めばオーテピアから借りたいということも当然増えてくるわけで、相乗効果はとても大きいと思う。高知市全体がそういうふうに変わっていけば、当然、高知県全体に与える影響も大きくなっていく。とても大事だと思うので、ぜひよろしく願いしたい。

【委員】

●県立図書館の独自機能の向上

市町村立図書館の重要性ということで、皆様にお話したいことがある。NTT が自社の正職員をリモート勤務を基本にすると去年の6月に発表し、7月から実際に取り掛かっている。13万人の正職員のうち、1割の人がリモート勤務を始めたとなると、1万3千人になる。おそらく一

人では引っ越さないで、家族3人として約4万人。NTT の1割が、地方でリモート勤務になっただけで、これだけの人が動く。大企業も同じようなことをやるだろうと言われている。同じような大企業が、10社で同じようなことをやったら4万人、25社で同じようなことをやったら、何と100万人が民族移動をすることになる。

同じ時期に、大手の不動産会社が、なぜあなたはそこに住んでいるのかを問う全国の7万人を対象にした大規模アンケートをやっていて、この結果は、見方によっていろいろだが、10人に1人くらいが図書館が良いからというふうに答えている。これには私もびっくりした。それ以外に公共施設があるからという答えもあるので、かなりの数の図書館がその中に含まれているのではないかと思う。おそらくIターン・Uターンというのは、どこの自治体にとっても最重要の政策だが今までのIターン・Uターンの一番重要なポイントは仕事の用意をするということ。仕事がないければ、Iターン・Uターンしてくれない。でも、今私が話したのは、仕事を用意する必要はないということ。仕事を持って引っ越してくる。しかも、大企業のバリバリのサラリーマンが。地元の企業とのコラボといった話も起きるかもしれない、あるいは、高い能力で街づくりに貢献してくれるかもしれない。一部上場の企業のそういう人材が、一気に引っ越してくるということで、これから取り合いになると思う。取り合いの中での重要な案件の一つが図書館ということになれば、図書館に力を入れざるを得ない。この話を何人かの市長さんや町長さんに話したとき、みんなが興味を持ってくれた。市町村の図書館の担当者に働きかけるというのも重要なことだが、それ以外の主要なポストの担当者に働きかけていくことがすごく重要で、さらに言えば、議会の議員の方たちの研修会とか市町村長の会合とか、そういったところへ皆さん出かけて行き、あるいは、知事に市町村長の会でそういった話をさせていただく。そういう戦略が非常に重要なのではないかと私は思っている。

図書館は全体に関わるシステムなので、一か所が良くなるとその自治体の住民に対する福利厚生に影響するということはもちろんあるけれども、一か所の図書館が強力になると県内全域の県民の福利厚生に影響が出てくる。一、二良い図書館ができれば、それが県全体を底上げしていくことになり、県の負担も軽くなるということになるので、その自治体だけにとどまる話ではないということがポイントだと思う。

●市全域サービス活性推進事業について

市立図書館の行政効果を表す方法がないかという話を何度もさせていただいたら、素晴らしい話が出てきたので、自分なりに計算してきた。県庁所在地で高知市と同じくらいの人口規模のところの県立図書館と市民図書館の貸出しを合計して市民一人あたりで割ると、和歌山市が4.6、奈良市が4.0、大津市が6.6、前橋市が7.1、那覇市が4.3。前橋市が7を超えている。高知市は7.1で、良い線いっている。ただ、在勤在学以外の、純粋に市外から借りに来ている方の数字が分からないので、そのあたりは分析する必要があると思う。他の市もそこまで分析はしていないと思うので、県庁所在地の市立図書館のサービス状況を分析するには、もう少し細かい分析手法を導入しなければいけないのではないかと思う。そのあたりは、「高知モデル」というものを確立して、他の市に訴えていくということも必要かなと思う。

【委員】

●県立図書館の独自機能の向上

前々からお願いしていた市町村立図書館等の支援については、ここにいらっしゃる多くの方がご存じだと思うが、新図書館基本構想検討委員会のおよそ10年からの宿題である。その頃は過激な意見もあり、安芸市と四万十市に中規模の図書館を一つずつ造って、高知市は高知市民図書館本館にお任せしたら良いとか、そういう意見を真顔で出していた時期もあった。その中で、非常に優れた中央の図書館を検討しようということで造り、そこから展開したらすごくうまくいくなということを考えて、委員の皆様と同じ気持ちでこのオーテピアにたどり着いた。そうした中で、今こそオーテピアの力を出して、市町村立図書館等の支援を進めていただけるということは、非常にありがたいことだし、オーテピアの状況を踏まえて、今朝も行ってきた「かみーる」などで、図書館の参考資料を新しく作ろうとかいろいろな動きがある。ぜひ、そういうものが成功してほしい。もう一つは、県立学校図書館との連携というのが子ども優先という観点からも、非常に素晴らしい取組である。

●市全域サービス活性推進事業

高知市民図書館については、私が前々から主張していたが、本館と分館分室の関係というのが、私にはどう見ても県立図書と高知市以外の市町村立図書館との関係に映ってしまう。高知市民図書館が、分館分室を生かしながら長年にわたって構築してきたものが、県立図書と高知市以外の市町村立図書館との関係に生かされると前々から思っていた。そういった意味で、高知市の新しい展開を、非常に素晴らしいと思っていたが、そうした中で今日、この資料にびっくりした。単なる分館分室の振興ではなくて、まさにオーテピアが地域自体の振興、地域自体の健康とか安全に対する取組というものを分館分室におおしていくのだ、と非常に感動しながら拝見した。特に、今回は御豊瀬と土佐山分室ということでお示しいただいたが、それぞれ特徴のある地域において、図書館が果たす役割は何だろうかということをも精密に検討し、それぞれの分室での図書館の取組になっている。また連携という意味では、地域活性推進課や土佐山地域振興課、土佐山学舎などと連携を進める中で、図書館がそれぞれの地域で大きな成果を出す核として取り組んでいる。本館であるオーテピアだけでなく、各分館分室が地域の核となって取り組んでいくことは、今後の高知県全体の図書館振興への影響も大きいということで、私は非常に素晴らしい取組だなと感動していた。

余談を言えば、「コテピア」という名前も非常に心に響いていて、大変素晴らしいキャッチーだと。追手前だから「オーテ」、というのもあるが、大きいというふうにとらえて「コテピア」、さすがだなと思った。そういう語呂合わせも含めて、担当されている方がご尽力されていることが分かり、たいへん素晴らしい計画になっている。ぜひ第2期の中に大きな成果を出しながら、第3期の計画につなげていただけたらと思っている。

【委員】

最後に私の感想というほどでもないが、少し話をさせていただく。

●委員会の在り方

最初にお二人の委員からご指摘があった委員会の在り方については、それを検討する委員会ということでは、これはまた面白い性質を持っていると思っているが、我々が掲げていたのは進化型図書館なので、委員会もそれに合わせ、図書館の進化に応じて、あり方の進化を考えることが大事だと思う。説明とコメントだけで終わってはいは(委員会としての)成果が足りないで、もっと気楽に話を聞きたい、もっといろいろなヒントがほしい、アイデアがほしい、ということがざっくばらんに話せる時間を何とか確保したい。委員のご指摘は、誠にそのとおりなので、そのあたりのことについて時間の確保や資料作成、出席者の関係など今後のことを含めて検討していただければと思う。

委員のお話、ご指摘とも関わり、職員の方の働き方改革といったほうが良いかもしれないが、図書館をどのようなものにしていったら良いか、図書館のあらゆる利用者が元気になれるアイデアは何かを考えていた。それは、利用者が図書館を訪れた時に、「ここなら元気がもらえる」と思えることや、そのような雰囲気味わえるということ。そのためには、ご指摘のとおり職員の方が元気であって、自分の勉強の成果を見せるということに自信をもって利用者に接してもらえることが一番大事だろうと思う。そういう形で、元気が与えられるような図書館を目指すということが、今後必要になってくるかと思う。

●新技術の導入について

委員が仰った ChatGPT などの生成 AI については、お付き合いを考えていかなければならないだろうと思っている。我々が言うのも口幅ったいが、これからどのように業務に活用するのか、委員のご指摘があったように、図書館員というか、司書の仕事に ChatGPT の情報収集能力をどう関わらせていくのか、これは他に先んじて検討を進めるべきだろうと思う。例えば、我々は情報リテラシーに関して、高知県で一番先端に行くという覚悟を持って図書館をスタートさせたはずである。そうであれば、ChatGPT などのいわゆる生成 AI の活用方法に関しても、他の部署に先んじて、欠点や長所をきちんと見て、質問にある程度は答えられるくらいの勉強が必要になってくると思う。これは大変なことだが、言ってみれば世界の命運がかかっている大問題なので、早めに取り組んでいただきたいと思う。

●県立図書館の独自機能の向上・市全域サービス活性推進事業

委員から指摘があった市町村立図書館の問題については、県立図書館と市町村立図書館の関係と、市民図書館本館と分館分室の関係の相似性のところをもう一度洗い直し、役割の見直しをすることも必要だと思う。

計画の進捗具合としては、非常に高得点が与えられるものだと思う。委員の方々のご指摘を参考にして、これからもますます計画を推進していただきたいと思う。

それでは議題3その他について、事務局から願います。

【事務局】

資料6

今後のスケジュール。

本年度、10月に第2回サービス計画推進委員会を予定している。